

コラム

高尚な組織づくり

高木兼寛は、何か事業をはじめるときには、まず志を同じくする者を集め、組織し、その組織全体で目的に向かうのを常とした。そして組織は大きくするよりも、むしろ各メンバーの志の高さを問題にした。そのことは成医会を組織するときにも同じことであった（成医会が慈恵医大の前身、医会成医会講習所をつくったことは説明するまでもないであろう）。当時、成医会の入会費は3円、会費は月額1円という高額であり（現在の価額にすると、それぞれほぼ3万円、1万円に相当する）、会員のなかには入会金を1円に、会費を月額30銭に下げて、会員をもっと増やすべきではないかという意見をだす者がいたが、兼寛は断然これに反対であった。そして「現在の入会費、会費に耐えないものは、即ち本会の目的に協力する資格のないものであるから、あえて費用を廉価にして人の多きを求める必要はない」というのがその理由であった。

病院や医学校の医師、教員を組織する場合にもそれは同じことで、これぞと思う人物があれば強引に勧誘した。日高 昂（後の慈恵医専眼科教授）がまだ青年医師であった頃、同じ薩摩出身の大先輩として兼寛を訪ねたことがあったが、そのとき兼寛はこの人物がよほど気に入ったらしく、後に高給をとって仙台の病院に勤めていた日高にこんな手紙を送っている。「君は往年東京に出てもよいと云っていたが、今もってその意であるか。じつは自分設立の東京病院において瀬脇ドクトル（院長）が辞職するについては、その後任として君を招きたい。給料はいま摂っているだけ遣る、また別に手当てがあるならそれも遣る、住居の世話もして遣る」というのであ

る(表現があまりに率直すぎて可笑しいほどである)。日高はその熱い勧誘にしたがって兼寛の配下に入り(明治25年)、期待どおり同病院の院長ならびに眼科の主任として大いに活躍した。同氏の手術は神技に近く、いたるところ可ならざるはなく、多くの手術に靈腕をふるった。また同氏の慈恵医専における講義やポリクリは極めて明快であり、学生にすこぶる好評であった。有名な訳著「明氏眼科学」も数少ない当時の専門書としてはなほだ学会に資するところが大きかったといわれる。

もう一つの例も(成功はしなかったものの)同じような話であるが、この場合の目標は野口英世であった。慈恵医専初期の細菌学の専任講師は、伝染病研究所で北里柴三郎に師事していた秦佐八郎であったが、秦は明治40年ドイツのエールリッヒのところに留学したため、その後任を探さねばならなくなった。

兼寛は秦の後任として、やはり北里の門弟であり、当時ロックフェラー医学研究所に留学していた野口英世を是非招きたいと考えた。兼寛が米国を視察旅行したとき(明治39年)、その研究所で青年野口が華々しく活躍していたからであった。しかし、そのことを野口に打診したところ、彼からは米国での研究を続けたいため、残念ながらご意向に沿えないという返事があった(兼寛からその結果を聞いた北里は、代わりに同じ門弟である綿引朝光を推薦した。つまり本学の初代細菌学教授である)。招聘には失敗したとはいえ、その後の野口の国際的活躍をみれば、兼寛の人を診る目が如何に確かだったかがよく分るのである。

一方、兼寛には、いったん自分らの仲間になった以上は、よかれあしかれ最後まで面倒をみななければならないといった考えがあった。ある時、医学校の事務長が会計をごまかしたことがあった。そのことを人から知った兼寛は、翌日その事務長の月給を上げてし

まった。「月給が足りないからやったんだろう、悪い人間じゃない、きっとよくなる」と言うのであった。もちろんその後は、そんなつまらないことは起こらなかったという。

晩年、兼寛は、長男であり後継者になった高木喜寛に、組織の和について、このように話したことがあった。「何かの争いがあったら、必ず両方の話を聞いて裁け。片方の言い分だけで裁いてはいかんぞ」と。これも組織の維持のための心得だったのであろう。